

小雨の中、重厚な高田家のカインヨ掃除

4月16日午前中、高田隼水さん宅（砺波市苗加）のカインヨ掃除を行なった。

小雨の中だったが、12名の会員が黙々とスンバを中心とした落葉をクマデ（コマザラエ）や竹ボウキで集め、2組のタンカ組みが、屋敷はずれの焼却場へ運んだ。約1時間半の仕事で広い前庭から蔵のまわり、母屋の東南面の落葉を集め、スカットしたクマデ跡を残した。雨で700坪（2,200㎡）の屋敷の3分の1ほどの掃除しかできず大変残念だった。

× × ×

雨具をとり、広間でお茶をよばれ、主人の高田隼水さんから供木時のことや、現存本数の中味のお話しを聞いた。特に木が好きで色んな木を植えてきたこととあわせ、「遺言に木を伐るなど書いておきたい」と話を結ばれ、一同笑いの中で温かい木への思いとこだわりを頂いた。

高田さん宅のカインヨは、3m以上の木が約130本あって、樹種、大小木、樹齢差等の組合せから立体感のある重厚な雰囲気をつくる。特に、母屋の東面から北西が広く、ケヤキ、スギを中心に果樹、タケも入り、外側に水路と生垣もあってのどかな自然をとどける。

当日の掃除に石川県や高岡市、南砺市からの会員が参加され、勇気づけた。その模様を富山新聞が次日報道した。



高田さん宅のカインヨ

高田さんのお話し（要旨）

- ・スギ中心にタイサンボク、ソメイヨシノ、ウラジロガシ、サワラ等数十種類の樹木のカインヨで砺波市の保存屋敷林に指定されている。
- ・第二次大戦時、この屋敷林からスギ、ケヤキ等の大木150本を供木した。その中には、天狗が住むと伝えられてきた4人が両手を伸ばし抱えられる大スギもあって、その伐採前には、神主のお祓いを受けた。
- ・現在のカインヨは、供木時胸高直径30cm以下のもので、それに戦後と平成に入ってから植えたものだ。沢山の鳥が集る。
- ・現存するカインヨの中味を大まかにまとめると、
 - 百年前後の樹齢のもの
 - スギ19本、サクラ、タイサンボク、クリ、クルミ、カシ各1本、カキ3本、ケヤキ3本 計30本
 - 戦後、昭和20年代に植えたもの
 - スギ41本、アスナロ4本、サワラ4本、サクラ3本、シュロウ4本、マツ3本、シラカバ、クリ、ウメ、モチ等 計70本
 - 平成以降に植えたもの
 - カキ、エンジュ、カシ、サクラ、イチジク等 計12本
 - 実生や鳥が運んで成立している3m以上の広葉樹 15本
 - 実のなる樹種
 - カキ、ウメ、クリ、グミ、イチヂク、アンズ、クルミ、カリン、ザクロ等 計29本
- ・敷地は700坪（2,200㎡）、供木前は、200本以上の大木があった。
- ・始末は大変だが、遺言に「木は伐るな」と書いておきたい気持ちでいる。



悪天候での掃除の様子

<日本科学者会議北陸シンポ>

天野事務局長が参加・報告

4月16日富山大学で、日本科学者会議北陸シンポジウム「環境と若者」が開かれた。

一般の部で「砺波平野のカイニョの価値と現状・課題」と題し天野事務局長が報告した。当日は元京都工芸繊維大学教授 宗川吉汪氏が「人のいのちを未来につなぐ」と題し基調講演。第2日目は、となみ散居村ミュージアムで砂田館長の講演後、見学会が行なわれた。

■報告要旨

1) はじめに——1900年後半以後の日本建築の多くは、自然を破壊し建築を成立させ、多くの生物を消滅させてきたに違いない。今後は、自然と共生した建築であるべきである。

また、人の豊かさ、便利さ、楽しさなどの価値観を根本的に変える時期に至っている。

2) 散居村の成立（生きぬくための形態）

・表土が薄く水田の水が地中に浸透。再び入れる水管理をしやすくし、他労働時間の確保。

3) カイニョとは、1. 人工林 2. 生活と一体で必要不可欠 3. 剪定や雪吊りなどを行わない。

4) カイニョの目的の今昔と生活

昔は、自給自足の生活。風が強く茅葺きの小民家は吹き飛ばされるため、カイニョ（防風林）を。

また、落ち葉や枝を燃料に。改築資材に利用。食料も自給。

近年は、家の構造・部材が強固に。燃料も石油等に変化。建築資材は輸入品。食料や薬が容易に入手。

今までのカイニョの役割が終了。よって、落ち葉や枝がゴミ。特に落葉樹（果樹も含む）の伐採を。

最近では、落ち葉や枝を田畑で燃してきたが、住民の生活基盤の変化で処理が出来なく困っている。

平成16年10月20日の台風23号でスギ1万6千本倒木。将来を心配しカイニョの伐採が進んだ。

しかし、一方自治体はカイニョの保存を目的に住民協定を締結すると維持目的の補助金を設けた。

5) 住民の思い——中年以上の住民多数は、カイニョ・景観保存を望んでいる。しかし、未解決の諸問題に不安を覚え、次世代へ自信を持って「残せ」と言えない。当然、諸問題解決を望んでいる。

6) カイニョの問題と対策

1. 落ち葉や枝がゴミに—固形燃料RDF等に加工。有機資源調査で回収可能確認—燃焼機器を安価に。

2. スギの倒木不安——①応急処置—枝葉を落とす

②長期対応—昔のカイニョに戻す。スギの横に落葉樹を植える。スギを群状に植える。

3. 雨樋対策—軒樋に落ち葉が詰まり樋を傷める。

①樋を極力設置しない・出入り口上部だけ ②軒樋にカバーを設置（雨樋ヘルメット）

4. 空き家のカイニョ ①管理無し—ケモノの住みか—近隣に迷惑—伐採必要

②空き家の利用を—社会政治経済問題を解決

7) これからのカイニョの意義

①先人の智慧の伝承—気候風土や環境との共生見本（循環の原理）

②生活の場—情操教育の場。多くの生き物が生息（生死のドラマがある）感性が豊かに。

③景観—カイニョ・農村の原風景の保存。故郷の景観保存。保存からの郷土愛を育てる。

④CO2対策（資料：林野庁／環境庁）・1人当たりの呼吸CO2排出量年間約320kg／人—

—スギ（50年生）23本で吸収。砺波市は1世帯2.7人で、スギ63本で吸収（目標に）

8) 終わりに

1. 太陽熱・光・水・空気・風・雲・雨・雪・火・樹木・昆虫・果樹・草花等他に感謝しましょう。

2. 問題を早急に解決し、次世代にカイニョの仕組みを体験を通し理解して頂こう。

3. カイニョ・景観の保存は、現状保存ではなく、昔のカイニョ・景観を造る目標が必要です。

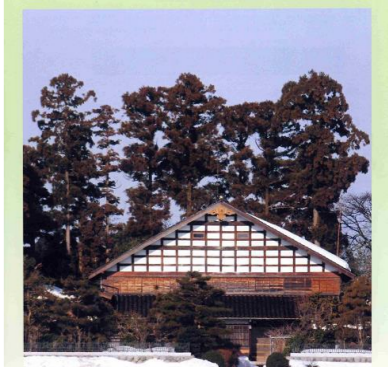
『「2010 全国屋敷林フォーラムin砺波平野」の報告とカイニョへの思い』 広く配付する

平成23年4月『「2010 全国屋敷林フォーラム in 砺波平野」の報告とカイニョへの思い』を作成した。

砺波カイニョ倶楽部と、となみ野田園空間博物館推進協議会で共催した昨秋のフォーラムをまとめたものである。その中にカイニョ倶楽部の「カイニョへの思い」を加え、冊子にした。冊子は、フォーラム参加者（住所のわかる方）、会員、県、砺波市、南砺市の関係者、振興会長等へ送付した。

カイニョ倶楽部として14年間の活動理念や主張、活動の中での意見をまとめた。砺波市、南砺市の図書館へも届けた。

「2010全国屋敷林フォーラムin 砺波平野」の報告とカイニョ（屋敷林）への思い



砺波カイニョ倶楽部
となみ野田園空間博物館推進協議会

フォーラムにつながる 砺波カイニョ倶楽部の「カイニョへの思い」

1. はじめに 砺波平野のカイニョ

(1) 木・森林と人

人は樹木のつくった長い時間の中で生きている。人の思い込みで一方的に木を否定し伐り倒すことは、地球と人間社会の破壊にまでつながる。すでにその予兆として地球温暖化や、土石流災害の多発がひっ迫している。日本の歴史をみると、森林の大伐採と規制が繰り返され、結果として安心、安全な人間社会の維持のために森林の利活用のルールをつくり、しっかり守る中で、日本の森林が保たれてきた。

(2) カイニョの発生

人と関わってきた樹木の境目は、砺波平野の開拓と一体につくられてきた。人が砺波平野で住み、生き、生産と生活を維持する智慧としてカイニョを必要とした。それが特異な砺波平野の景観と風土となった。カイニョは、実利から未来への価値を発信する平野での貴重な遺産として注目される時代に入っている。

(3) カイニョの価値

カイニョの持つ色んな価値は、人の時代からみる強弱はあっても、活用可能な力としてしっかり生き続けてきた。カイニョは二酸化炭素の吸収、酸素の供給、各種芳香、酵素、イオンを発生し、その仕事を休まず続ける。スギを例にみると樹齢35年生、樹高8メートルのスギ15本で、一人一年出す二酸化炭素を吸い取り、幹として固定し、代りに酸素を供給してくれる。そうした樹木の中で、人は安んじ、快適な毎日を送っている。あわせカイニョの存在は色んな効用をつくり続けている。防風、防雪、防水、防音、温度緩和、建物保護、季節のうつろい、ゆらぎ、安らぎ、香り、殺菌、鳥・小動物のすみか、果実、食用草類、花水、環境、景観、建築用具資材、燃料、肥料等毎日準備し、いつでも提供できる体制を保持している。

(4) 人のつくったスギカイニョ

今のカイニョは、スギ中心の組織をつくっているが、これはごく最近 数十年前からの人の求めでつくられたものである。かつてのカイニョは高木でも沢山の樹種の組合せでできていた。砺波平野のカイニョの中にある高木の樹種は44種ある。特に戦前までのカイニョの中身をみるとケヤキ、マツ、ヒバ、ネズコ、サワラ、ハンノキ、クリ、カシ、等がほとんどのカイニョに入っていた。スギ中心の単純な林相にしたのは、人の希望によってなされたものである。

(5) 景観・環境からの注目

カイニョの姿と砺波平野 8,000 戸の広がりには特異な砺波平野の景観として、別荘の感動を醸成する。又、存在していることが、環境への貢献にもなっている。時代の注目を浴びる。個人の利害や期待でカイニョを建てる時代ではなくなっている。個人の所有物、個人の責任という範囲で、短期的効果を感じないカイニョを処理できなくなっている。多様な価値を際立たせる具体的な解決策が求められる。

2. 住民の受けとめ方—くりに否定的な面をよりあげるとは

(1) カイニョの価値を否定

毎日カイニョと同居している個人は極めて実利本位で合理的にカイニョと向き合い、決意には否定的、消極的な態度をとり、考えからカイニョの思想を裏面に認めるようとはしていない。

(2) 具体的には

①実利として価値を得るものがない——建築・生産生活資材、燃料、果実、防風で、
②実利価値——倒木、薪材で建造物に被害。
③居住価値——毎日の掃除、整枝、その処理作業が負担。
④倒壊のつまり

(3) 理由

建物、室内環境等、全てが人工・自動的に処理できるようになった。カイニョにゆだねられなくなり、むしろ、カイニョのために人が手をかけ維持していくことがわづらわしくなってきた。又かつての農業を中心とした仕事から、住居を離れた仕事を中心になり、カイニョとの関係が時間ごとなくなり、異質になっている。

3. カイニョと共に生きる

(1) カイニョの活用と思想の再考

カイニョを伐り、全く無くなった人の気持ちや思いを聞くこと、大きな後悔が残ると、カイニョの活用や思想は、本質になってよいのかを深く問い、カイニョと向き合う距離をも具体的に押し、それを解決する道を探ることも必要である。又、時代の求めるカイニョへの期待についても深く問い理解することに努め、そこにどんな手だてを投じていくかの道の探求が求められている。

(2) 実命として受け止め新しい価値を

カイニョのあることの実命・リスクはカイニョと一緒に暮らす上で当然として受け止めよう。毎日カイニョの下にいて実命の知財のない価値を受けていることを考え、確認する。子どもを育てる親の活動と同じで、カイニョのリスクを実命として受け止め、新しい価値の期待をもって接することだ。

お知らせ

3月の役員会で、天野事務局長の庶務的な仕事を手伝ってもらう方として、高畑康子さんを推薦しお願いしました。文書関係の仕事が中心です。早速、4月のカイニョ掃除の例会からご協力いただきました。

また、新しい会員も誘って下さい。今年に入って5名の方が入会されました。